

西都市教育研究センター

I	研究主題と副題	・・・	10	1
II	主題設定の理由			
III	研究目標			
IV	研究関連図			
V	研究内容	・・・	10	2
1	さいと学研究班			
(1)	さいと学のねらいとこれまでの取組			
(2)	デジタルコンテンツの充実			
2	英語教育研究班	・・・	10	5
(1)	小学生英語村の企画・実施			
(2)	評価について	・・・	10	6
(3)	「読む・書く」活動を取り入れた授業について			
3	学力向上研究班	・・・	10	8
(1)	本研究班が目指す学力			
(2)	「ジャンプアップ西都」と「Web 学習単元評価システム」 との連動した取組			
VI	成果と課題	・・・	10	10
1	成果			
2	課題			
○	研究同人			

I 研究主題と副題

『教育ブランド西都』の具現化を目指して
～西都市の子どもたちの可能性を広げるために～

II 主題設定の理由

本市は、教育基本法の理念と西都市民憲章の精神及び第4次西都市総合計画（前期基本計画：平成23年度から平成27年度）を基調として「『たくましいからだ 豊かな心 すぐれた知性』を備え、郷土に対する誇りと国際感覚にあふれ、新たな時代を切り拓いていく気概をもち、心身ともに調和のとれた人間の育成」を目指している。

その具現化に向け、平成21年度より、すべての小中学校が教育課程特例校の指定を受け、『教育ブランド西都』の創造をキャッチフレーズに、市内二校の県立高等学校とも連携し、全市を挙げて小中高一貫教育に取り組んでいる。

また、本年度より銀上小学校・銀鏡中学校が、平成25年度からは三納小学校・三納中学校及び三財小学校・三財中学校が一体型一貫教育校へと移行し、地域に根ざした特色ある学校づくりがおおいに期待される場所である。

一貫教育の推進にあたっては、本センターもその一翼を担い、『教育ブランド西都』の具現化に向け、市教科等研究部会や宮崎国際大学と連携を図りながら、研究実践に取り組んでいるところである。昨年度は、本センターの取組を“検証の年”と位置付け、研究実践に取り組んできた。本年度も継続研究を念頭に昨年度取組の中で明らかになった課題を踏まえ、以下の三つの視点から研究を実践・深化させていくことで『教育ブランド西都』の具現化を目指そうと考え、本主題を設定した。

－研究の視点①－

文化遺産等の豊富な教育資源を有する西都市の良さに気づき、『さいと学』を通して、ふるさと西都を愛する児童生徒を育成する。

－研究の視点②－

小学校1年生から導入している連続性、一貫性を重視した英語教育を通して、国際人として活躍できる児童生徒を育成する。

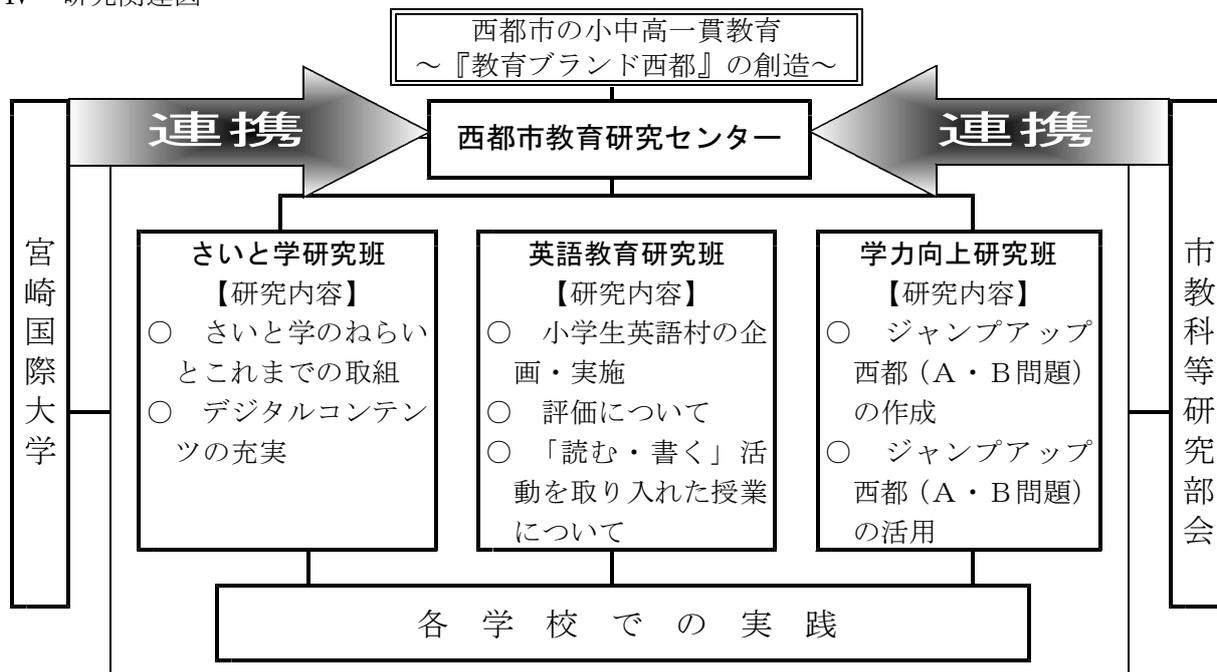
－研究の視点③－

視点①、②の基礎となる確かな学力を身に付けさせる。

III 研究目標

- 1 「さいと学」の活用状況の調査結果を生かすとともに、新たなデジタルコンテンツの開発・充実、活用をより一層図っていくことによりふるさと西都を愛する児童生徒の育成を目指す。
- 2 英語教育の充実に向けた組織間の連携強化を図るとともに学習内容や指導方法、評価のあり方等について工夫改善することにより、国際人として活躍できる児童生徒の育成を目指す。
- 3 Web 学習単元評価システムと連動した西都独自の問題の作成・活用を図ることにより、ふるさと西都を愛し、国際人として活躍するために必要となる確かな学力の定着を目指す。

IV 研究関連図



V 研究内容

1 さいと学研究班

(1) さいと学のねらいとこれまでの取組

さいと学は、「ふるさと西都が大好きな児童生徒を育成する」ことを主なねらいとしている。児童生徒が、西都市の自然・環境、歴史・伝統、産業・生活など、西都市の教育資源を有効に活用しながら学習し、その特色や課題を理解するとともに、西都市とのかかわりの中で、自分を見つめ直し、西都市の未来や自分についての生き方について考えることを通して、生涯に渡ってふるさとを愛する心と態度を育てる学習である。

小学校1年生から4年生までは各学校の実態に応じた地域素材の活用を、小学校5・6年生及び中学校では、共通の素材を活用するなど地域素材を活用した系統的な学習内容構成配列表を作成している。平成20年度には、児童用テキストの小学校5・6年生用と中学生用を作成し、平成21年度には、教師用手引き書を作成している。

また、テキストや手引き書に加え、加筆修正が容易であり、共有性に優れているというメリットから、平成22年度・23年度にはさいと学のWebページ上で利用できるようにデジタルコンテンツの作成を始めた。デジタルコンテンツは、授業ですぐ活用できる教材をデジタル化し、提供できるようにすること、さらにさいと学のねらいや取組を周知することを目的に作成している。【表1】のよ

【表1】 デジタルコンテンツの充実に向けた今後の方向性

	デジタルコンテンツの充実化に向けた取組と今後の方向性
平成22年度	○ さいと学Webページ開設 ○ 小学校用コンテンツ作成 ・ 各学校に応じた資料の作成
平成23年度	○ 小学校4年生まで ・ 資料の追加 ○ 小学校5・6年生用 ・ バケツ稲、西都原古墳群に関する資料追加 ○ 中学校 ・ リンク集の追加
平成24年度	☆ 方向性 ◎ 小学校5・6年生用のコンテンツの充実化 ◎ 中学校用のコンテンツの充実化
平成25年度	☆ 方向性 ◎ 小学校・中学校のコンテンツの完成

うには、デジタルコンテンツの基盤となるさいと学Webページの開設、そして、小学校用のデジタルコンテンツを中心に作成している。また、平成25年度までには「さいと学の基本的なこと」については、デジタルコンテンツで対応できるようにしていく。

(2) デジタルコンテンツ (<http://www.miyazaki-c.ed.jp/saitokkc/index.html>) の充実

ア 本年度の取組

デジタルコンテンツはテキストや指導書と違い加筆修正が容易であるというメリットがあり、発展性があるため、平成23年度版デジタルコンテンツをさらに充実・発展させることが、本年度の取組となった。そこで、西都市の全教員を対象にデジタルコンテンツのさらなる充実化を目指し、①デジタルコンテンツの利用率、②教員の必要としているデジタルコンテンツの把握を主な目的として、6月にアンケートを実施した。

アンケート結果から、デジタルコンテンツの利用率は予想外に低く【表2】、さいと学のねらいが十分に教員に浸透されていないことが明らかとなり、本年度の取組をさいと学のねらいを全ての教員に確実に浸透していくことと、デジタルコンテンツの充実化を図るこ

との2つに設定した。

(ア) さいと学のねらいの浸透

さいと学のねらいを全ての教員に確実に浸透させるために、夏季休業中に

行われた西都市教育委員会主催の「西都市授業力 brush-up 研修会」の中で本センターの中間報告を行い、さいと学のねらいについて【図1】のようにプレゼンテーションを用い、分かりやすく説明した。

また、本研究班は、本年度より市教科等研究会総合的な学習の時間部会との連携強化を図りながら、各学校におけるさいと学における指導上の課題を洗い出し共有していく中で、さいと学のねらいを再度見直している。なお、その際、本研究班の取組や進捗状況について説明したり、デジタルコンテンツについても教師の生の声を吸い上げたりすることにより、利用率の向上や充実化につながり、お互いの情報の共有化を図る場となっている。

本年度は意見を集約しデジタルコンテンツの利用率を向上させるために【図2】のようにデジタルコンテンツ一覧表を各学校に配付するきっかけともなった。

(イ) デジタルコンテンツの充実

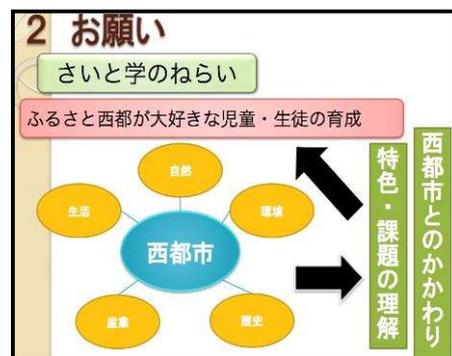
○ 小学校のデジタルコンテンツ作成

本年度は、西都市小学校体育主任会と連携して、西都市内の全小学校の高学年が踊る「子ども臼太鼓

踊り」についてのコンテンツを中心に作成した。体育主任会においては、毎年、夏季休業中を利用して、「子ども臼太鼓踊り講習会」を実施しているが、時間的な都合や人数の確保等、様々な課題もあり、指導者に確実に指導方法や踊り方を伝授できていない状況であった。そこで、「子ども臼太鼓踊り」の指導方法や踊り方をデジタルコンテンツとして、Webページ上にアップすることにより、いつでもどこでも確認することができ、児童にも模範を見せることができることから、動画【図3】と静止画【図4】の両方をデジタルコンテンツとして作成した。

【表2】デジタルコンテンツの利用率 (%)

	よく使う	使う	あまり使わない	使わない
小学校	3	11	32	54
中学校	3	11	8	78



【図1】中間報告会プレゼン

小学校1・2・3・4年生		東北小	豊北小	高田小	三好小	穂積小	山形分校	三好小	東小
1	【ずいぶんはかばかなう】	たくさんはかばかなう	木のひみつをしよう	はるの森をたのびましょう	高田の自然をたのびましょう	すていよ！だいこんじいば			【ずいぶんはかばかなう】
2	校庭のわかしたんけん	学校のわかしたんけんをしよう	なかしんあそびをしよう	新田の森をたのびましょう	三好の森をたのびましょう	校庭のわかしたんけん			校庭のわかしたんけん
3	ヒーマン舞臺になろう	ヒーマン舞臺になろう	ヒーマン舞臺になろう	新田舞臺になろう	ヒーマン舞臺になろう	ヒーマン舞臺になろう	西都のヒーマン舞臺になろう		大田舞臺になろう
4	地域の歴史・文化の宝になろう	地域の歴史・文化の宝をしよう	地域の歴史・文化の宝をしよう	地域の歴史・文化の宝をしよう	地域の歴史・文化の宝をしよう	わたしたちの歴史・文化の宝をしよう	伊賀マシコについて調べてみよう		地域の歴史・文化の宝になろう

【図2】デジタルコンテンツ一覧表



【図3】子ども臼太鼓踊り動画



【図4】子ども臼太鼓踊り静止画

なお、小学校1年生から4年生までのコンテンツについては、各学校において実践が進み、年間計画等の見直しの時期に入っていることから、次年度に充実を図っていく。

○ 中学校のデジタルコンテンツ作成

中学校では、各学校から届いたさいと学に関する資料を集約し、平成22年度に作成したデジタルコンテンツ掲載データ一覧表【表3】をもとに、

ワークシートや画像、プレゼン資料などのデジタルデータの加筆修正を行い、更新を行った。

掲載データ一覧表のマスを一つつつ埋めていくようにデータを収集していくことで、資料収集のポイントが絞られ、効率的に資料を収集することができた。下記の【図5】及び【図6】がワークシートとして新たに追加された中学校1年生と2年生のデジタルコンテンツの一部である。

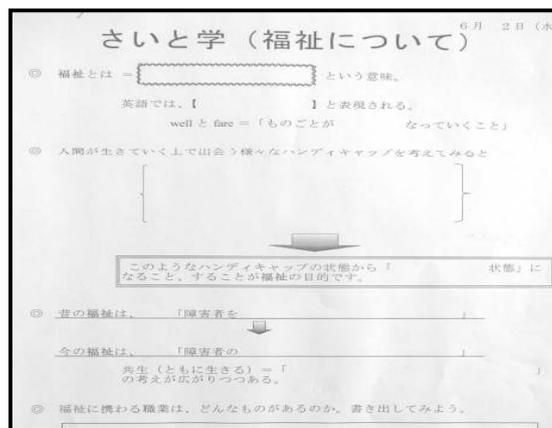
【表3】中学校用デジタルコンテンツ掲載データ一覧表

学年	単元名	学習内容	掲載するデータ	指導書 ページ	データの形式								
					動画	音声	ワークシート	写真	資料	プレゼン	その他		
第2学年	西都市と移住旅行先の産業や生活の実態調査と比較	他の地域と西都市を比較しよう	調査のテーマの立て方	47.51.52			ワークシート						
			調査計画書の様式	47.51.52			ワークシート	参考資料			プレゼン		
			調査活動の記録用紙	48			ワークシート						
			調査の実際（聞き取りの実際録）	48	動画			参考資料	写真	音声	プレゼン		
第2学年	調査活動のまとめ、発表	調査活動のまとめ、発表	調査のまとめ方（まとめ方の工夫）	49.51.52			ワークシート	参考資料			プレゼン		
			地域比較のしかた	49.53				参考資料			プレゼン		
			まとめの実際（探査紙、紙芝居など）	49	動画				写真	音声			
			発表のしかたの工夫	50.54				参考資料			プレゼン		
			発表の実際	50.54	動画					写真	音声		

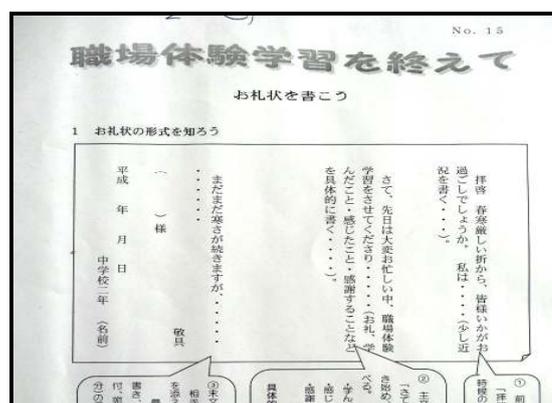
○ 参加型のデジタルコンテンツ作成

各学校がこれまで、さいと学学習のために作成し、集約されたデジタル資料は、他の学校においても十分に活用できるものであることが分かった。そこで、本センターのメンバーや各学校の総合的な学習の時間担当に呼びかけを行い、各学校において作成及び活用しているデータやワークシート、各資料を収集した。集まった資料等は、内容も充実しており、十分活用できるものであったため、いくつかのデータは本研究班で加筆修正を行い、デジタルコンテンツに新たに加えることができた。

本年度の取組をとおして、より多くの先生方のアイデアをデジタルコンテンツに盛り込み、「さいと学」がより一層充実するよう取り組んでいきたい。



【図5】デジタルワークシート①



【図6】デジタルワークシート②

2 英語教育研究班

(1) 小学生英語村の企画・実施

ア 事前ミーティングの実施

昨年度の反省で、実施スタッフのミーティングの必要性が課題としてあげられた。

これを踏まえ、宮崎国際大学の担当者との打ち合わせを行い、小学生英語村にかかわる研修スタッフ・学生サ

ポートスタッフとの事前ミーティングを実施した。スタッフの構成は【表4】の通りである。

ミーティングの実施により、担当者間のコミュニケーションが図られ、活動内容についての共通認識をもつことができた。

また、昨年度は研修スタッフも兼ねていた6年学級担任を健康安全管理等、児童のサポートに専念できるようにした。

【表4】スタッフ構成

名称	メンバー	活動内容
研修 ※1教室 あたり	・教授1名 ・中学校英語科 教諭1名	・活動を指導実施する。
	・学生ボランティア3名程度	・活動を指導実施する。 ・3名の内、1名は、道案内を行う。 ・道案内が終わり次第教室に合流する。
学生 サポート	・学生ボランティア	・バス降車から体育館までの誘導をする。
サポート	・小学校6年担任	・健康安全管理 ・グループ内の児童相互の関係を考慮し指導する。 ・活動の指導は行わない。 ・児童とともに行動する。

イ 小学生英語村の実際

小学生英語村の参加対象は市内の小学校6年生全児童である。本年度は夏季休業中7月30日(月)、31日(火)の2日間で実施した。内容は、【表5】のとおりである。

ワークショップについては、諸外国の文化に触れ、英語を通してコミュニケーションを図ることを目的として、アメリカ・韓国・スコットランド・アメリカ(ハワイ)・

【表5】小学校英語村の内容

NO	内容
1	入村行事
2	ワークショップ1
3	ワークショップ2
4	昼食
5	ワークショップ3
6	閉村行事

ブラジル・オーストラリアの5つの国、6つの教室を設定した。

児童は、A～Fの6グループに分

【表6】ワークショップローテーション表

国名	アメリカ	韓国	スコットランド	アメリカ(ハワイ)	ブラジル	オーストラリア
ワークショップ1	A	B	C	D	E	F
ワークショップ2	F	A	B	C	D	E
ワークショップ3	E	F	A	B	C	D

かれ、【表6】のようにローテーションを組んで、3つの教室で様々な活動を体験できるように配慮した。

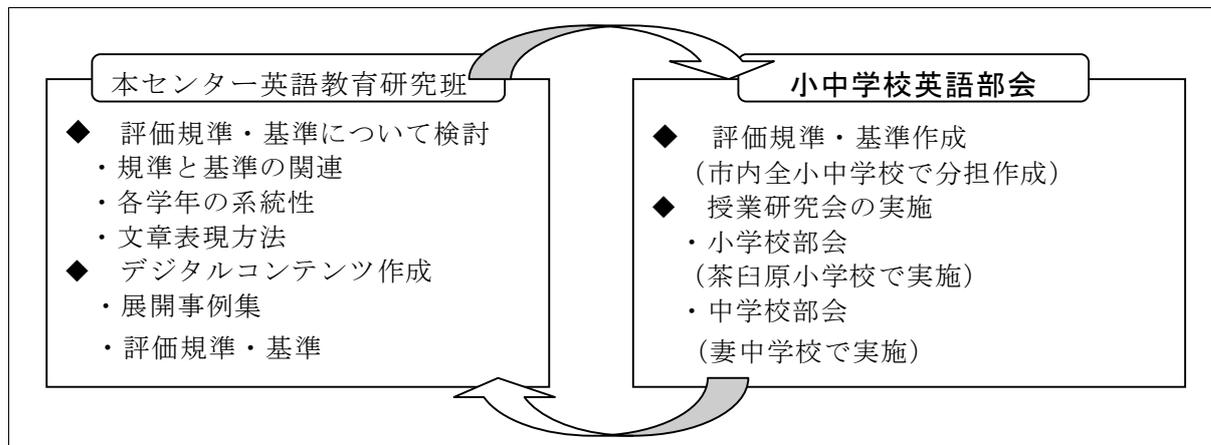
内容については、それぞれの国の紹介を全て英語で聞き、その国特有のゲームを児童が体験する活動を行った。ゲームを体験する場面では、【図7】のように英語を使う機会が多くもてるように、活動を工夫することにした。



【図7】英会話を促す様子

(2) 評価について

評価については、評価規準・基準を本市教科等研究会の小中学校英語部会と連携し、作成した。本年度の連携概略は【図8】の通りである。



【図8】本センター英語教育班と市小中学校英語部会の連携概略

(3) 「読む・書く」活動を取り入れた授業について

ア 英会話科における「読む・書く」活動の内容整理と系統

英会話科（小学校5・6年）において「読む・書く」活動を取り入れた授業を行うにあたり、まず、その内容について整理し、系統性をもたせることにした。内容については、中学校英語科につなげるため、英語科教師が感じている必要性を検討し、①アルファベット②へボン式ローマ字③英単語と整理した。

系統については、「書く」活動における段階的な指導を行うため、5年生時には空書き、6年生時には四線紙に書く活動を取り入れることにした。これは、5年生時に書くことへの抵抗を少しでも減らしながら、6年生時には中学校英語へのつながりを意識し、書くことに慣れさせるためである。

このような考えのもと作成した英会話科における「読む・書く」活動の系統表が【表7】である。

【表7】英会話科における「読む・書く」活動の系統表

学年	5年			6年			
	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期	
アルファベット	読む	【展開前半】		【機をみて】		【展開前半】	【機をみて】
		大文字⇒小文字 (判断できるようになる)			大文字・小文字 (判断できる・復習)		
	書く	【展開前半】		【機をみて】		【展開前半】	
		大文字⇒小文字	大文字小文字	大文字小文字	大文字⇒小文字	大文字・小文字を自由に	フォニックス
(空書き)			(四線上)				
へボン式ローマ字	3年生で習ったローマ字の復習(読む・書く)		へボン式ローマ字を知り・覚える(読む・書く)		へボン式ローマ字の復習(読む・書く)		単語・名前・文などをへボン式ローマ字で読み、書く。
英単語	名詞を中心に、普段使っている言葉について目や耳で慣れさせる。			動詞を中心に、普段使っている言葉について目や耳で慣れさせる。			
※単語のスペルは、小学校1年生から授業の中で見せて慣れさせる。							

イ 「読む・書く」活動を取り入れた英会話科（小学校5・6年生）授業モデル

前述の【表7】英会話科における「読む・書く」活動の系統表に基づき、授業モデルを提案する。時間配分は導入を5分、展開前半として「読む・書く」活動を10分、展開後半として年間計画に位置付けられた内容を20分、まとめを5分とした。学習問題については、「読む・書く」活動のめあてと年間計画に位置付けられた目標の二つのめあてを設定することにした。【表8】が学習指導過程モデル展開例の一部である。

【表8】小学校5・6年生 英会話科 学習指導過程モデル展開例

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点		○準備
		T 1	T 2	
導入 5分	1 はじめのあいさつや天気などの話をする。	○ 楽しく英語を学べる雰囲気をつくる。	○ 体調や天気、日時等簡単な会話を行わせる。	○ 天気などのカード
展開前半 10分	5年生の例 2 学習問題を確認する。 ○「読む・書く」活動のめあて ○年間計画に位置付けられた目標 3 アルファベットの練習をする。 ○読み・・・大文字ABCの歌 ○書き・・・aからf 月、曜日	○ 学習問題を板書し、確認させる。 ○ 児童を観察し、読めていない児童、書けていない児童を支援する。	○ 歌を歌ったり、身体全体を動かして書かせたりして楽しく取り組ませる。	○ アルファベット表 ○ CD
	6年生の例 2 学習問題を確認する。 ○「読む・書く」活動のめあて ○年間計画に位置付けられた目標 3 アルファベットの練習をする。 ○読み・・・小文字aからz ○書き・・・aからg 月、曜日	○ 学習問題を板書し、確認させる。 ○ 児童を観察し、読めていない児童、書けていない児童を支援する。	○ 四線に高さを合わせて書けるよう支援する。	○ CD ○ パワーポイント ○ 四線カード

ウ 英会話科の授業の実際（小学校5年の例）

授業モデルに基づき、「読む・書く」活動を取り入れた授業を11月に妻北小学校で実施した。特に本授業においては、「読む」活動としてアルファベットの大文字の形を意識させるため、身体表現【図9】を取り入れた。「書く」活動として、小文字を「空書き」【図10】し、テキストを使った「なぞり書き」【図11】を取り入れた。



【図9】身体表現



【図10】空書き



【図11】なぞり書き

エ 英会話科の授業の実際（小学校6年の例）

授業モデルに基づき、小学校6年生の授業を三財小学校で12月に実施した。特に本授業においては、「読む」活動として、アルファベットの小文字全てを読む活動を取り入れた。「書く」活動として、小文字を四線紙に書く活動【図12】を取り入れた。



【図12】四線紙に書く

3 学力向上研究班

(1) 本研究班が目指す学力

学習指導要領の基本的な考え方にに基づき、本研究が目指す学力は次の通りである。

- ① 基礎的な知識及び技能
- ② ①を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等
- ③ 主体的に学習に取り組む態度

(2) 「ジャンプアップ西都」と「Web 学習単元評価システム」との連動した取組

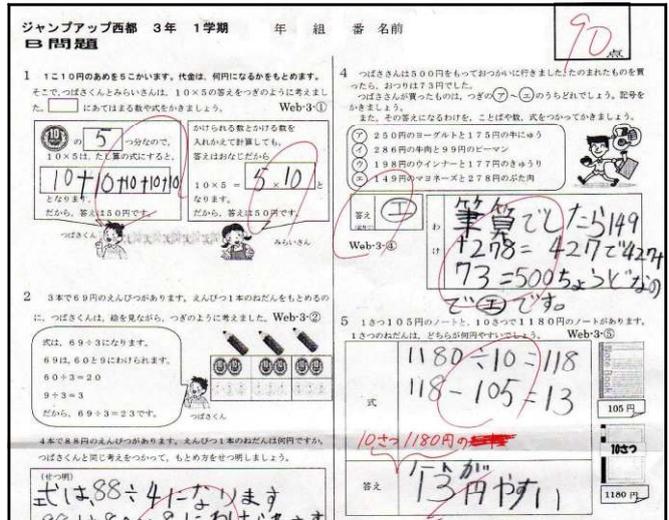
ア 「ジャンプアップ西都（A問題・B問題）」の作成

本研究班では、昨年度より県教委作成のWeb 学習単元評価システム（以下「県 Web」）の「小学校算数学習単元評価問題」をもとに、学期末の学習状況の評価と習熟をねらった「ジャンプアップ西都」という評価問題を作成している。

昨年度は、「県 Web」の各単元の評価問題から基礎・基本を問うA問題を集約し、「ジャンプアップ西都（A問題）」を小学校全学年・全学期分と中学校の一部を作成した。今年度は、活用する力を問うB問題を作成し、児童生徒の実態に応じてA問題と【図13】を使い分けることで、基礎・基本の学習状況や活用する力の学習状況をそれぞれ評価できるようにした。

「ジャンプアップ西都」は、B4用紙1枚（表にA問題、裏にB問題）に各学期の学習内容が集約されており短時間で取り組むことができるため、A問題は、各学校のスキルタイムの時間等に実施することができる。「県 Web」と併用して計画的に活用していくことで、児童生徒の学習状況をよりきめ細かに把握することができ、学習内容の確実な定着を図っていくことができる。

また、解答も用意してあるので、家庭学習での活用も可能である。【図14】のようにホームページから自由にダウンロードして自主的に学習することはもちろん、教師が印刷して宿題としても活用できるので、より効果的に習熟を図ることができる。



【図13】ジャンプアップ西都 B問題

		学習の部屋							
		算数・数学コーナー							
		この問題は、各学年の基礎的・基本的問題を学期ごとに1枚のプリントにまとめたものです。							
		A問題		1学期		2学期		3学期	
小学1年生	問題①	問題①解答	問題②	問題②解答	問題③	問題③解答			
小学2年生	問題①	問題①解答	問題②	問題②解答	問題③	問題③解答			
小学3年生	問題①	問題①解答	問題②	問題②解答	問題③	問題③解答			
小学4年生	問題①	問題①解答	問題②	問題②解答	問題③	問題③解答			
小学5年生	問題①	問題①解答	問題②	問題②解答	問題③	問題③解答			
小学6年生	問題①	問題①解答	問題②	問題②解答	問題③	問題③解答			

【図14】西都市教育研究センター HP

イ 「ジャンプアップ西都（A問題・B問題）」の活用

(ア) スキルタイムでの活用

各学校が設定しているスキルタイムの時間（各校15～20分）に、「ジャンプアップ西都」による基礎・基本の徹底を図るため、【図15】のように1・2学期末の7月、12月に実践を行った。主に本研究班員の学級やその学年の約500名を対象にして実施した。

スキルタイムにおいて「県web」に取り組んでいる学校は多い。このことから、特に学期末に期間を絞ってこの「ジャンプアップ西都」を活用することで、「ジャンプアップ西都」と「県 Web」との連動をより図ることができる。



【図15】スキルタイムでの「ジャンプアップ西都」の活用

(イ) 児童名簿による「ジャンプアップ西都」結果記録を通じた学習状況の把握

【図16】のように「ジャンプアップ西都」の採点后、学級名簿に得点を記録し100点に到達した児童の到達率を出した。その後、間違えた問題の補充指導や個別指導を行った後、次のスキルタイムで同じ問題に取り組ませた。すると、100点の到達率は上がっても、得点の伸びに個人差があることがわかった。また誰に個別指導が必要か、どの単元の理解が十分でないのかなど、教師が各学期の指導について振り返ることができ、その後の補充指導に生かすこともできた。

さらに、その後宿題プリントとしても活用し、理解の定着を図った。

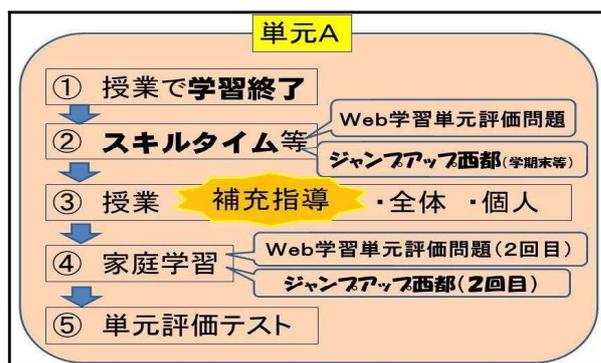
100点を連続してとれた児童には、「ジャンプアップ西都B問題」のプリントで活用する力を育成できるようにした。B問題については、一度「県Web」で同じ問題に取り組んでいるので、問題の数値は変わっていても、比較的スムーズに解くことができた。ただし、解く時間については個人差があり、時間内に終わらない児童も見受けられる。「ジャンプアップ西都」の問題の見直しや、児童が時間内に集中して取り組むトレーニングも以後必要である。

こうしたサイクル【図17】を、学期末だけでなく、定期的に行うことで、学習内容が定着しているのか、把握することができ、事後の指導に生かすことができる。

また、これらの取組をより効果的に行うためには、単元の学習進度や評価の時期も検討し、各学校のスキルタイムの指導内容を明らかにした上で指導計画を立て、計画的に指導を行っていく必要がある。

項目		7/5 わり算	7/2 わり算	7/2 宿題	7/9 わり算	7/27 算数	7/29 4p
氏名		100	100	100	100	100	100
		80	80	80	80	0	70
		100	100	100	95	50	100
		100	100	100	100	70	90
		65	75	95	85	80	80
		100	100	100	100	100	100
		80	85	85	95	95	30
		100	95	95	100	100	20
		100	100	100	B	100	85
		100	100	100	B	100	100
100点到達率	A	66%	64%	60%		44%	72%
	B					4%	36%
	A	9人	16人	15人		11人	18人
	B					1人	9人

【図16】 児童名簿による結果記録と学習状況の把握



【図17】 学習内容定着のためのサイクル

(ウ) 「ジャンプアップ西都」記録表による児童の自己評価

児童による主体的な学習を目指すため、【図18】のように児童が記録表に点数を記録し、自分の得点の推移はどうなのか、自分がどんな間違いをしているのかをチェックすることができるようにした。児童の感想からは、自らの注意力不足に気づいたり、自分の苦手なところに気づいたり、点数を向上させようと意欲が高まったりしていることが分かる。

こうして、「ジャンプアップ西都」への取組を児童自身にふり返らせることで、主体的に学習に取り組む態度を育成できると考える。

平成24年度 3年 ジャンプアップ西都 記録表		3年 1組 名前[]							
学年	学期	単元名	チェック	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	感想
3年	1学期	1 九九の表とかけ算		A	A	A	B	A	B問題の文章は意味がわからず書くようにしてせんぶ100点をめざす ABも100点だったので今度は100点がいいです。 3回目のABもうっかりミスとしないように100点をとりたいてす
		2 わり算	✓					100	
		3 円と球							
	2学期	4 たし算とひき算の筆算		100	100	100	80		
		5 1億までの数	✓						
		6 たし算とひき算	✓						
		7 時間と長さ	✓	A	A	A			
		8 あまりのあるわり算	✓						
		9 計算のじゅんじょ		95	100	95			
		10 三角形					B		
		11 1けたをかけるかけ算の筆算	✓						
		12 重さ	✓				90		

【図18】 「ジャンプアップ西都」記録表による児童の自己評価

VI 成果と課題

1 成果

- さいと学研究班
 - ・ デジタルコンテンツのさらなる充実を図ることを目的としたアンケートを西都市全教員を対象に実施したことにより、本年度研究の方向性の焦点化を図ることができた。
 - ・ 小学校では、高学年の子ども臼太鼓踊りの動画コンテンツ、中学校では、ワークシート等のデジタル資料を加え、デジタルコンテンツがさらに充実してきた。
- 英語教育研究班
 - ・ 「小学生英語村体験研修」において、事前ミーティングを実施することにより、宮崎国際大学との連携が深まり、共通認識をもって本市の6年生に英語でのコミュニケーションの場を提供することができた。
 - ・ 小学校英会話科における「読む・書く」活動の系統表を作成し、それをもとに学習モデルを構築することができた。また、モデルに基づいた授業研究会の実施により、「読む・書く」活動を授業レベルで共通理解することができた。
- 学力向上研究班
 - ・ 算数・数学科の学力向上を目指すことを目的に、Web 学習単元評価システムと連動した「ジャンプアップ西都」を作成・活用したことで、単元の評価に生かされるとともに、児童・生徒の学習状況を把握でき、より個に応じた指導ができるようになった。
 - ・ 小学校においては、児童による自己評価を取り入れたことで、より主体的に学習に取り組む態度を育成することができた。

2 課題

- さいと学研究班
 - ・ 西都市内の全教員を対象に行ったアンケートの結果、明らかになった実態や課題の解決に向け、参加型デジタルコンテンツの充実、発展を図ることで、その有用性を検証していく必要がある。
- 英語教育研究班
 - ・ 「読む・書く」活動を取り入れた授業展開を継続し、検証を行い、充実を図っていく必要がある。
- 学力向上研究班
 - ・ 現在、一部の小中学校によるモデル的实践であるので、市内小中学校共通の取組として推進を図っていくとともに、「ジャンプアップ西都」の工夫・改善を図りながら、学習指導のあり方をさらに検証していく必要がある。

《研究同人》

所長	綾 寛光（教育長）		
主任研究員	永田 和久（都於郡小学校）		
研究員			
さいと学研究班			
中山 哲也（妻南小学校）	有吉 英伯（茶臼原小学校）		
川本 祥文（都於郡中学校）	田村 智宣（銀鏡中学校）		
英語教育研究班			
松浦 寿人（三財小学校）	筒井 雅子（妻北小学校）	下川 奈緒子（穂北中学校）	
東 絵美（三納中学校）	谷口 明文（三財中学校）		
学力向上研究班			
日高 誠一郎（穂北小学校）	齊藤 裕美（妻北小学校）	岩切 敦（三納小学校）	
吉野 達三（都於郡小学校）	壺岐 孝平（妻中学校）		
主事	明松 伸浩（学校教育課係長）	事務	高山 めぐみ（学校教育課主任主事）